

「もも」の恩返し

岩手県花巻市立花巻中学校

三年 中村 萌々

私の祖母は、今年の五月に八十歳で亡くなりました。祖母は私が生まれた頃に認知症を発症しましたが、私が小さい頃はとても私をかわいがってくれていたそうです。でも東日本大震災の年に認知症が進み、家で介護することが難しくなり、施設にお世話になることが決まりました。小学校低学年だった私は、祖母の病気がどんなものかわからず、施設に面会に行く母と一緒に、おりがみやメッセージカード、工作など祖母が喜んでくれそうな物を持って会いに行っていました。私達が行く嬉しそうなお顔をして話をするので、会いに行くのが楽しみでした。

しかし、だんだんと認知症が進み、車イスでしか動けなくなりました。表情もなく、私達が会いに行っても誰が来ているのかわからないようで、会話もできなくなっていました。私はその頃になると、どうせ誰だかわからないようだし、行くのも面倒くさい、自分の予定もいろいろあるし、次に母が行く時について行くことにして、今回は行くのをやめておこうという考えになっていました。母も変わっていく祖母を私達に見せるのが辛くなり、無理に私を誘わず、自分だけ会いに行くことが多くなっていました。

す。

今年の四月下旬になり、施設の方から祖母の体調があまりよくなり、日中も眠っていることが多くなったという話を聞きました。孫の顔を見れば少し元気になるかもしれないから一緒に行こうと母が私に言いました。心の中ではどうせ私が行ってもわからないかと思いましたが、ついに行くことにしました。施設の駐車場に車を停めた時、満開の桜の下に車イスの方と、施設の若い女の介護士さんがいるのを見つけました。母が、

「あれ、ばあばじゃない?」

と言って桜のところまで駆け寄りました。車イスの人は確かに祖母で、とても穏やかな顔で桜を見ていました。若い介護士さんが私達にむかって、

「今日は午前中の熱も下がり、体調も良さそうだったから二人でお花見を楽しんでいました。」とお話してくださいました。私はその瞬間、自分が

情けなくなりました。それは、自分の思いだけで、どうせわからないだろうから何をしてあげても意味がないと祖母のことを勝手に思っていたからです。介護士さんの『お花見を楽しんでいた』という言葉から、祖母を私以上に大切に思っていることに衝撃を受けました。施設から帰る車の中で、施設で祖母がどれだけ愛されて生活しているかを母から聞くことができました。施設の方は祖母から直接聞くことができないので、昔好きだった食べ物のことやどんな所に行くのが好きだったのか、趣味や特技などを家族から聞いて、たくさんのお話を聞いてくれたそうです。スイーツ好きだったことを聞いては、ケーキ屋さん連れて行ったり、踊りを習っていたことを聞いては、寝たきりになった祖母に踊りの曲を聴かせたりと、感情や意志のある人として、お世話してもらっていたのです。私は、意味がない

なんて思わないで、これからは何度も会いに行つて、祖母との時間を大事にしていこうと思えました。

でも、時間は待つてはくれませんでした。突然、祖母が亡くなったという知らせが入ったのです。私の心の中は悲しみと後悔でいっぱいになりましたが、母達が、

「ばあばは、よく頑張ったし、最後に大好きな桜も見ることができて幸せだったね。」

と言っているのを聞いて、祖母から、そして施設の方から人として生きていくのにとっても大切なことを教えてもらった気がしました。それは、どんなに小さい子供達でも、自分の思いを伝えられない人達でも、この世の中に生きている限り、みんな同じだということなんです。どうせしてあげてもわからないだろうではなく、もし自分がやってもらったら嬉しいだろうと思うことは人にやってあげていいんだということなんです。

私が小さい頃、祖母はよく私をベビーカーに乗せて、春は桜を見に連れて行ってくれたそうです。そんな優しい祖母を今度は私が花見に連れて行ってあげられたら、本当は最高だったかもしれないが、残念ながらできませんでした。でも、祖母と介護士さんからたくさんのお話を聞いてもらって、これからどう生きていくか教えてもらったような気がします。だから私は、絶対に行動にうつしていきたくないと強く思っています。空の上から見守っている祖母に、変わった姿を見せるために。